

式 辞

若葉が萌える今日の佳き日に、明誠学院高等学校第二十五回開校記念式を挙行できますことは、私たち教職員、また生徒にとりまして、この上ない喜びであります。感謝にたえません。

開校記念日にあたり、本校創立の経緯とその後のあゆみを、皆さんとともに振り返りたいと思います。まず、創立の経緯です。

今から九十六年前の大正十四年、本校の前身である「岡山県真備高等女学校」が、婦人団体の方々のご尽力により誕生しました。

その中心的な役割を担われたのが、岡山連合婦人会の方々でした。当時は、女子の高等学校への進学率は非常に低く、婦人会は県や市に対し学校の新設を要請しましたが、財政難を理由に実現の見通しはたちませんでした。このため、私立の高等女学校を建設することを決議したのです。

創立の前年の大正十三年、「高等女学校建設連盟」が組織され、資金を集める運動が始められました。この時、岡山県出身で大阪の実業界で活躍されていた八代裕太郎・麻三郎の両氏が校舎建設資金と

して十万円の寄附金を抛出されました。十万円という額は、現在では十数億円に相当する大金です。有り難いことでした。また、学校用地については、地元津島西坂の方々のご尽力で、当時の軍用地の一部を払い下げてもらったことができました。

こうして学校建設の基礎はできたものの、その後も資金集めは困難を極め、婦人会の役員の方々は、一口一円の募金をしていただくために、足を棒にして走り回ったと伝えられています。

苦労と困難の連続の末、ようやく大正十四年四月十日、「岡山県真備高等女学校」は五年制の高等学校として開校しました。大正十四年というのは、西暦で言えば千九百二十五年のことです。青空のもとで行われた入学式で初代校長である西森元先生は、木箱の上に立って式辞を述べられたそうです。そして、四月二十六日に第一回の開校記念式が行われました。以来、四月二十六日を開校記念日としています。

戦後は、学制の改革により校名を「岡山県真備高等学校」と改め、普通科の女子校となりました。昭和四十二年には、それまでの木造校舎から、現在の鉄筋校舎に建て替えられました。

このような変遷の中、本校は女性の社会的地位向上という目標の

もとに、創立以来多くの人材を世に送り出してきました。

そして、創立七十周年の年、つまり平成九年の年に、学園をさらに発展させる転機を迎えました。男女共同参画の流れの中で、時代の要請に応え、次代をリードする人材を育成するための改革を推し進めました。新しい教育目標を掲げ、地域社会・国際社会に貢献できる人材づくりの取り組みが始まったのです。改革には四つの柱が設けられました。「校名の変更」、に始まって「男女共学」、「新しいコース制」、そして「新しい制服」でした。この改革の方針のもと、平成九年四月から「明誠学院高等学校」として、新たな歴史を刻むことになりました。

明誠学院高等学校の第一期生は男子百四十二名、女子二百六十七名、合わせて四百九名。「特別進学」「進学総合」「情報」「国際ボランティア」の四つのコースでスタートしました。

その後、平成十三年度に「特別芸術コース」を新設。平成十六年度には、「情報コース」を「新情報コース」に改めました。翌、平成十七年度には、国公立大医学部・歯学部・薬学部の現役合格を目指す「特別進学コースⅢ類」と「Ⅱ類」、そして「社会福祉コース」を新設し、平成十九年度には、特別進学コースに「Ⅰ類」を設けまし

た。

さらに平成二十二年度には「社会福祉コース」を「保育・福祉コース」に改め、平成二十五年度から「新情報コース」に公務員系を設けました。

令和三年度には特進コースⅡ類に岡山大学進学系、新情報コースに「ICTエキスパート系」を設けました。進学面では最難関の東京大学、京都大学、国公立大学医学部医学科への合格者を出すまでにになりました。

また、部活動の活性化を図るため、平成七年度には「けやきの森総合グラウンド」を整備。平成十九年度にはけやきの森総合グラウンドの中にログハウス風の研修棟「誠心館」が完成し、現在、勉強合宿や部活動の合宿などに活用しています。

このような歴史をたどりながら、九十六年の間、変わらず掲げ続けられたのが、皆さんご存知の校是の「まこと」です。

「まこと」は中国の古典の名著「中庸」の中心を成す考えで、本校のめざすところです。

本日はその中から特に皆さんに身につけて頂きたい、また、参考

にして頂きたい「学び」について、取り上げます。

書物の中で「博く学び、篤く実行する」ことが、奨められています。そして、学び始めたら途中で止めずに徹底的に突き詰めるようにすることの大切さが説かれています。他の人が一回でできることが、自分にはなかなかできない、そんな場合はこれを繰り返し百回行う、つまり百倍の努力をする。他人が十回でできることを自分が出来なければ千回努力する、という考えです。この考えに思いを深めていくことが「まこと」への道筋だと、私は思います。

皆さんがよく知っている四字熟語に「温故知新」がありますね。

「故きを温ねて新しきを知る」と日本語に訳されることが多いのですが、この言葉も「中庸」の中に見つけることができます。

最後になりましたが、在校生の皆さん、本校が地域社会の人々の熱い思いで生まれてきた学校であることに誇りをもち、同時に、多くの人たちに支えられて、今日があることへの感謝の気持ちを忘れないでください。そして、大きな目標と志を持って学校生活を送ってください。

皆さんの活躍が後輩に受け継がれ、良き伝統を創り上げ、益々成長・発展することを祈念して式辞と致します。

足早に九十六年は過ぎ行けど

「まこと」は根付けり

この学び舎に

令和三年四月二十六日

明誠学院高等学校

校長

小池 仁